# 林読耕斎の漢詩覚書

## ――王朝文人詩とのことなど――

本間洋一

### 一

林読耕斎（春徳。一六二四―六一）は、父羅山（一五八三―一六五七）や兄鵞峰（春斎。一六一八―八〇）に比べると、今日では恐らく餘り言及されることのない人物ということになるのではあるまいか。江戸期劈頭の儒学者として名高く、その該博な知識をもって徳川家康の信任を得、家学の基盤を創った偉大な父。そして、長子としてその箕裘を継承し、学問の家としての林家を確立させた秀才肌の兄。その蔭にかくれるように、才学にめぐまれながらも、その早い死故に驥足を展ばしえなかった薄命の読耕、という構図は多分稿者のみが抱いている感慨ではあるまい。その伝としては原得斎『先哲像伝』（巻一。弘化元年〈一八四四〉刊）あたりが簡にして要を得たものとして知られ、詩文集に『読耕先生全集』全三十冊（冒頭に「読耕林子年譜」がある。『読耕林先生文集』二十巻、『読耕林先生詩集』二十巻、『読耕先生外集』二十巻から成る）もあるのだが、父兄に比べ巷間に出回っているとは言えず、気軽に読める情況にはない。[1] 読耕には没後編纂された詩文集の他に興味深い著述が幾つかある。その中でたぶん最もよく知られているのは『本朝遯史』（二巻。没後の寛文四年〈一六六四〉刊）であろう。本朝の上古より中世に至る隠者伝の嚆矢として知られる本書は、「性不レ願二仕官一、常有二出塵之志一」（息子の林晋軒「読耕林先生全集後序」）ったという彼の思いの在処を伺う意味でも興味深いが、そうした著作について言及するのは別の機会に

委ね、今は彼の詩文集に遊んでその王朝文人やその詩との関わりの一斑について記すことから始めてみたい。

読耕と本朝の古代漢詩との出会いは恐らく彼の主体的な営為あってのことではない。本朝の修史に並々ならぬ意欲を持っていた父に、寛永二十一年（一六四四）遂に『本朝編年録』編修の命が下る。鵞峰・読耕の二子は当初その事業を支えるべく各々神武～持統紀、文武～淳和紀を担当。読耕分について言えば、早くも未定稿ながらも正保二年（一六四五）頃には一応の形を整えていたようだ。文武～淳和帝世の記録としては、『続日本紀』『日本後紀』の正史があるが、周知のように『後紀』は甚しい残闕本である。従って彼は先ずその闕を補い埋めるという苦心惨憺を強いられることになったはずである。『日本紀略』をベースに『類聚国史』『類聚三代格』『扶桑略記』『公卿補任』といった国史資料の目通しは当然のことながら、他に重要な資料として、『懐風藻』『凌雲集』『文華秀麗集』『経国集』『本朝文粋』『性霊集』『日本霊異記』等の文事に関わる記事をも渉猟し取込む作業を猛烈な早さで行わねばならなかった。それは二十歳を漸く越えてはいたが、心身の消耗する容易ならざる作業であったに相違ない（兄鵞峰の担当部分はこれに比すれば『日本書紀』に多く縋ること可能であった）。羅山・読耕没して後、寛文六年、これを草稿として鵞峰は改正加筆し、『本朝通鑑』に取込むことになるのだが、それは読耕が寝食を忘れて没頭し、遂に眼疾を被るに至る辛苦の成果に他ならなかったのである。

ところで、読耕の修学は、「読耕林子年譜」に依れば八歳（寛永八年）からということになる。兄鵞峰から『大学』『論語』の手ほどきを受け、次いで『孟子』『中庸』を読んだり、『保元』『平治』『源平盛衰記』『太平記』に親しみ（九歳）、『詩経』『書経』『春秋』を読んで、『三体詩』『錦繡段』を誦し、倭漢の故事に関心を示す（十歳）。次いで『易経』『礼記』を読み、蘇東坡・黄山谷の詩文を嗜み、『左氏伝』『古文真宝』を父に授けられている（十一歳）。十二歳にして初めて絶句を賦し、次いで『史記』、或は李白・杜甫・韓愈・柳宗元の集を読み（十三歳）、詩文述作につとめる他、『日本紀』神代巻の講筵に列なったりしている（十五歳）。十六歳ともなると、父の蔵書を博覧、経史子集や百家の小説、本朝の旧記を読破（多少誇張はあるにしても）したという（猶本稿末尾参照）。大先輩の人見卜幽軒（一五九九～一六七〇）や父の弟子筋でほぼ同年の坂井漸軒（一六

二三～一七〇三）辻端亭（一六二四～六八）らと詩作・聯句に興じ始めるのもこの頃からで、翌年には自らの家集を編してさえいる。[2] その一方で父の課した策問百餘条に兄と共に対えて、それが一書にまとめられてもいる（『攻堅従容録』）。また京都の詩仙堂石川丈山（一五八三～一六七二）の為に、父に替って「三十六詩仙」の品題を択び、返書も代作したのは十九歳の時のことで、以後二人は書簡を通じて交遊を深め、やがて丈山にその詩才を絶賛されることになる（「函三秀才、茲者示レ詩、標致健然、有二壮浪之姿一、無二彫鐫之弊一、諷詠不レ已、次韻和呈」『覆醬集』巻下）。こうした修学の過程で彼は自ら詩文への強い関心を育んでゆくことになるのだが、その彼が本朝の古代の漢詩の盛栄期に『本朝編年録』編修を通じて逢遇した意義は存外小さくないものと思われる。兄鵞峰とその子梅洞の王朝漢詩や詩人への関心（『本朝一人一首』や『史館茗話』、そして『続本朝通鑑』における文事の重視など）とも連繋しているように思われてならないのである。

## 二

王朝文人やその詩への言及、或は評価に関して、中世禅林には餘り見るべきものはない。[3] 禅林の僧達の眼は、その詩文集を見る限りにおいてのことだが、唐土（宋以後も含む）に向けられてはいても、（虎関『元亨釈書』を除き）本朝の歴史・人物に対する関心度は低いと言わざるをえない。[4] ところが、それが林家の者により次第に顕在化させられてくるようになる。[5] 読耕の場合に例をとってみると、例えば次のようなものがある。

……文選之所三以為二文選一者李善之功……又聞有二公孫羅註一、本朝之昔有二読レ之者一、江匡衡是也、吾未二之見一也、且嘗江両家之外、弘貞・常嗣・諸成・隆頼皆暗誦、其敏才豈愧二中華一乎。……

（「報二武田杏仙一」『読耕林先生文集』巻三）

しかもこれらの記述の背後に具体的な典拠（必ずしもそのすべてではないにしても）を提示することも可能だということは注意されてよいだろう。[6] こうした文人に関する知見は読耕の中でも一層の広がりと深まりをみせるようになってゆくようだ。

……夫亀山者、兼明親王蒐裘之地也。今吾子誠有二遥思之感一哉矣。延喜帝之群皇子、就中有二学術文才一者兼明也。身都左相之位而闔国之大任、既在二其手一、無レ奈二藤実頼浸潤之譖、膚受之愬何一也。已所謂、君昏臣諛、無レ処二乎

愬一。此憤激之所レ発也。其遺文粗載在二明衡之文粋一。読二其座左銘一而知レ非レ無二言行之省察一也。読二其請レ被レ停レ職状一而知下不レ貪二朝位一、老境優然上也。山亭起請、池亭之記、風流幽閑、可二以想一焉。惜哉、有レ才而不レ用、有レ志而不レ遂。吾将下以二此人一為中本朝之陳思王上也。吁、今人不レ見二古時月一、今月曽経照二古人一。古人今人若二流水一、共看二明月一皆如レ此。

（「寄二報金節一」『読耕林先生文集』巻四）

ここでは、『本朝文粋』所収の兼明親王の諸作に想いを馳せつつ、当時の彼をとりまく政治的情況を窺い、その作品を端的に論評した上、彼を本朝の「陳思王」（曹植）だと称えているわけであるが、事はそれで終わらない。その歴史の一齣を照射することに依り、今在る自分達の世界もそれと連続し繋がっているものであることを、確と知らしめるべく訴えかけているように思われるのだ。そして、更に言えば、兼明を曹植に比べるあたりにも、前掲の武田杏仙宛書簡の「其敏才豈愧二中華一乎」同様、次第に「中華」に対する「本朝」、日本の歴史や文化に対する積極的な評価に踏み出してゆくことになる林家の姿勢を垣間見せてくれているように思われてならないのである。その意味でも殊に注目されるのはやはり所謂「倭漢十題雑詠」ということになろうか。(7)

読耕は「倭漢十題雑詠後序」(8)（『読耕林先生文集』巻十三）冒頭で、「日域為二我輩父母之国一、則其事跡亦不レ可レ不レ知也。是倭漢十題之所二由作一也」と趣意を簡略に述べ、その端緒について語る。時は寛永十九年（一六四二）秋の休日、父兄等と共に蘭若に雅遊し、和漢の故事各十件を標出し、籤引で詩歌を参会者に詠ぜしめた事に始まって、翌年夏には既に六百首にも達したと言う。以後多事多端の為断絶もあったが、立詮の熱意もあり、羅山の許可を得て鵞峰・読耕兄弟も協力、慶安四年（一六五一）七月に再興され、承応二年（一六五三）仲春には「凡三千篇」にも至ったという。今その読耕作の一端に触れてみることにしたい。

菅原清公（「十遣唐」の一）

儒在二菅原一名不レ空。聘唐専対記二清公一。馬蹄帯得汴州雪。
融作二日東和気風一。

（慶安四年十月十六日『読耕林先生詩集』巻十二）

延暦二十三年（八〇四）七月に日本を離れた遣唐使船は暴風雨にさらされ、第三・四船は行方不明。大使藤原葛野麿の第一

船も一ヶ月餘の漂流を餘儀なくされ、福州からの入京にも多大な困難が待ち受けていたが、第二船は副使石川道益の急死はあったものの、遣唐判官菅原清公一行は九月に明州を発して十一月には長安に到着。遅れた大使一行も十二月二十三日に漸く入京して翌日に信書と貢物を奉進。その翌日には歓待の宴が宮中で設けられている（『日本後紀』延暦二十四年六月）。「与二大使一俱謁二天子一、得レ蒙二顧眄一、二十四年七月帰朝」（『続日本後紀』承和九年十月十七日、菅原清公薨伝）とあるから、病死直前の徳宗にも程なく謁見できた。猶、掲げた詩の第三句は、勿論「雲霞未レ辞レ旧。梅柳忽逢レ春。不分瓊瑤屑。来霑二旅客巾一」（「冬日汴州上源駅逢レ雪」『凌雲集』）の一篇を意識したもので、入京途次の雪もとかす春の和風の如き人物として清公を詠ずる。後年のことになろうか、先の清公の五言詩の世界を絵画化した「菅清公汴州遇（逢）雪図」なるものがあったようで、鵞峰の息鳳岡（春常。一六四四～一七三二）にはそれに題した七絶二首（『鳳岡林先生全集』巻四十九、巻五十三）が見えて、頗る興味深いものがある。

小野篁（「十文人」の一）

野篁岑守子。才調無二等倫一。志気頗豪放。低二視世上人一。

隴頭秋月明。試場筆無レ塵。献二書藤三守一。自衒請レ修レ姻。

鶯花吟玩日。慈恩遊会辰。一伏三仰事。俗説不レ有レ因。

天長令義解。夏野蒙二糸綸一。此時代作レ序。文才達二帝宸一。

承平（ママ）聘二中華一。常嗣為二使臣一。此人是其副。憤鬱志不レ伸。

逡巡難二首途一。皇命徴責頻。決然不レ航レ海。到レ此逢二逆鱗一。謫二去八十島一。風帆一葉身。波瀾洗二壮懐一。長韻独吟呻。此行渠自取。贖罪誰敢論。爾後幸徴還。八座恩栄新。惜哉寿不レ久。五十一年春。至レ今小野氏。綿延幾族親。足利学校在。遺蹤永不レ泯。近世奉二浮屠一。正レ道奈レ乱レ真。

大江朝綱（「十文人」の二）

江氏箕裘家業昌。音人没後有二朝綱一。涙レ纓惜レ別蕃韓客。手牒通レ情呉越王。賦二了婚姻一文粋跡。論二成運命一甲科場。相逢兜率白居易。机上驚嗟夢不レ長。

（以上二首、慶安四年十月二十五日。同前巻十二）

この二人は王朝の文人の中にあっても多分最も個性的な存在、詠まれるにふさわしい人物と言ってよい。篁の薨伝は『文徳実録』（仁寿二年十二月二十二日）、官歴も『公卿補任』（承和十四年初掲）で容易に知れ、考えように依っては、その情報

に寄掛かり詠んでしまうことも可能である。彼の薨伝にはその為人や行動、業績の類が詳説されて、既に十分それにふさわしい内容を有している。ところが、読耕は、より「十文人」の題に添うべくと考えたか、かなりの詩句を薨伝には記さない文雅を語る為に費やしている。五・六句は「奉試賦二得隴頭秋月明一」（『経国集』巻十三）、七・八句は「奉二右大臣一書」（『本朝文粋』巻七。『十訓抄』第四－44にも）、九・十句は「慈恩院初会詩序」（『文粋』巻十）、十一・二句は『江談抄』（第三－42）又は『十訓抄』（第七－6）、十三～六句は「令義解序」（『文粋』巻八）、二十五・六句は『古今集』（四〇七）や『今昔』（巻二十四－45）等の諸書に引かれる「わたの原」の名歌に関わる。また、末尾の足利学校に儒教尊重の意を込め、浮屠（仏教）が篁を取込んでいることを難ずる排仏の姿勢は、例えば父羅山の「小野篁遺跡考」（『林羅山文集』巻六十三）同様のものと言える。篁は林家の詩文集によく顔をみせているが、兄鵞峰に「野篁十美」と題し篁の美談を採拾した十詠（各題は「詔諭世業」「隴月及第」「白詩暗合」「文章無双」「二王之倫」「撰令義解」「遣唐当選」「唐人唱和」「清貧至孝」「家塾遺迹」）を成す作（『鵞峰林学士詩集』巻七十五）に止めを刺すか。

また、次の朝綱詠にも触れておく。三・四句は名句「前途程遠、馳二思於雁山之暮雲一、後会期遥、霑二纓於鴻臚之暁涙一」（『朗詠』巻下・餞別632。『文粋』巻九・253「夏夜於二鴻臚館一餞二北客一詩序」『江談抄』第六・11）と「南翔北嚮、難レ付二寒温於秋鴻一、云々」（『朗詠』巻下・恋782。『文粋』巻七・183「為二清慎公一報二呉越王一書」）に絡み、五・六句は「男女婚姻賦」（『文粋』巻一・15）「論二運命一対策」（同巻三・78）を念頭においたもので、末二句は『古今著聞集』（巻四・文学五「大江朝綱夢中に白楽天と問答の事」）あたりに依っているということになる。猶、『江談抄』や説話書には朝綱の逸話が数多く見えているから、その文事資料を利用すればより長篇の作も可能だったろう……などという望蜀の嘆をつくのは読耕に餘りにも気の毒な気がするが、いずれにしても、『本朝編年録』編纂の過程で、文献を蒐写しながら広く深く本朝の故事に目を向けてゆく彼の姿を彷彿させずにはおかない。父弟没後『編年録』を継承しつつ兄鵞峰は『本朝通鑑』（正・続篇）を完成させる（寛文十年〈一六七〇〉）わけだが、その彼の詩集を一瞥すると、この編纂過程で「本朝故事七十二題」詠（『鵞峰林学士詩集』巻七十）「本朝詠月百題」（同巻九十一）などの本朝故事詠（文

事詠も多い）が一層の増加をみていることがわかり、彼らの志向の一斑を窺うことができるように思う。

## 三

先述の他にも王朝文人詠は少なくないのだが、[9] ここで少し視点を変えて、王朝詩一首そのものを材に読耕が詠んだものを挙げてみると次の如くである。上段が読耕作の題、下段が原詩題ということになる（猶、各詩を対応させて提示し、その詠みぶりを比較検討するのも或は一興かも知れないが、今は稿の煩雑を避け、機会を改めることとしたい）。

「大江以言閏三月尽陪二吉祥院聖廟一詩」〈閏月事令〉　……　「三月尽日陪二吉祥院聖廟一同賦二古廟春方暮一。各分レ字詩一首。探二得分字一。并序」大江以言（『本朝麗藻』巻下）
（『読耕林先生詩集』巻十三）

「滋野貞主城外聴レ鶯」〈十鶯〉　（同右）　……　「和下滋貞主城外聴レ鶯簡二前藤中納言一之作上」嵯峨天皇（『経国集』巻十一）

「長屋王宴二新羅客一」〈十宴〉　（同右）　……　「於二宝宅一宴二新羅客一」長屋王（『懐風藻』）

「平城天皇桜詩」〈十桜花〉　（同右）　……　「賦二桜花一」平城天皇（『凌雲集』）

「一条院瑶琴治世音詩」〈十天子〉　（同右）　……　「瑶琴治世音」一条天皇（『本朝麗藻』巻下）

「良峯安世暇日閑居詩」〈十皇族詩〉　（同右）……「暇日閑居」良岑安世（『経国集』巻十一）

「清原夏野扈二従梵釈寺一詩」〈十槐門詩〉　（同右）……「扈二従梵釈寺一応制一首」清原夏野（『経国集』巻十に題のみ詩欠。嵯峨・淳和・三原春上の作が『文華秀麗集』巻中、『経国集』巻十に見える）

「参議藤原万里遊二吉野川一詩」〈十月卿詩〉　（同右）……「遊二吉野川一」藤原万里（『懐風藻』）

「中納言大江匡房遊二安楽寺一詩」〈十月卿〉　（同右）……「古調詩。参二安楽寺一」大江匡房（『本朝続文粋』巻一）

「橘在列廻文詩」〈十雲客詩〉　（同右）……「廻文詩」橘在列（『本朝文粋』巻一）

「菅丞相賦二黄憲一」〈十詠史〉　（同右）……「八月十五夜(日)厳閤尚書授二後漢書一畢、各詠レ史得二黄憲一、并序」（『菅家文章』巻一、『扶桑集』巻九）

「紀長谷雄詠二龐公一」〈十詠史〉　（同右）……「後漢書竟宴各詠レ史得二龐公一（并序）」（『扶桑集』巻九）

「小野岑守秋柳」〈十柳〉　（同右）……「九月九日侍二宴神泉苑一各賦二一物一得二秋柳一」（『凌雲集』）

「藤敦光遊二青龍寺一」〈十遊寺〉　（同右）……「与二諸友一遊二摂州青龍寺一」藤原敦光（『本朝無題詩』巻九）

原詩を所収する右の漢詩文集のうち、当時板本として刊行されていたのは『本朝文粋』（寛永六年〈一六二九〉、正保五年〈一六四八〉の刊本あり）くらいのもので、他はすべて写本に依る流布である。修史を視野に入れていた林家がこれらの書を蒐蔵していたのは流石で、恐らくは父羅山が若年から不断の謄写につとめていた成果も少なくなかろうが、家康の権威によって蒐集された駿府の御書庫（駿河文庫）の管掌に当たった（慶長十三年〈一六〇八〉）ことは、多分彼の学問的環境を大きく考えたはずであり、国書を含めた謄写も一層進んだに相違なく、『本朝文粋』や『菅家文章』との邂逅もそれ以後のことではあるまいか。ともあれ、前掲書を誰もが所有できる時代ではなかった中で、読耕は父から大いなる恩恵を受けたわけだが、それのみならず、この頃にこうした本朝の詩文集を読込むということもかなり特殊な情況下の知識階層に限られていた可能性が高かろう（中国の唐宋以後の詩文集ならともかくとしてである）。或いは、前掲の対応も殊更に場の為にしたもので特段の深い意味はないと考えるむきもあるかも知れない。しかし、前述した王朝文人の逸事への言及をふまえつつ、また次のような例を見るにつけ、御座成りでない彼らの王朝詩文への傾頭ぶりに思いを新たにせずにはおれない。

赤坂髭君　（十娼）　※二首

鎖子観音現二婦容一。神崎長者性空逢。髭君試比垂鬚仏。
美色淫声迷二殺儂一。

韓娥餘韻繞二梁欞一。赤坂今看傀儡師。趙炳徐登匪レ無レ例。
疑男化レ女尚留レ髭。

（『読耕林先生詩集』巻十六。承応元年十二月作）

観世音菩薩様がこの世に婦人のお姿で出現されるという。あの性空上人様は生身の普賢を見奉りたくて寝てもさめても思い続けていたが、とうとう夢に神崎遊女の長者をみるべしとのお告げがあって出向き、これを見て感涙に咽んだという（『十訓抄』第三―15、『古事談』第三―95）。ところで、赤坂には髭君[19]なる者がおったそうで、さしずめ垂鬚仏とでも申しましょうか。その美しくもなまめかしい蠱惑する悩殺声を聞いたらさぞ我輩も盪かされたことでしょう。後の一詩は、韓娥の素晴らしい歌声

の餘韻は梁を繞ること三日も絶えなかった（『列子』湯問）と言うが、今でも赤坂にそんな倡女がおるそうな。徐登（本来は女子だったが化して丈夫と為り巫術を行う）と術師趙炳の如き親密な関係の前例もあったくらい（『後漢書』巻八十二下・方術列伝第七十二下）だから……思うにその赤坂の髭君は男が女に化けていて、それで口髭を留めているというわけではないのだろうか。二首はこんな意になるかと思うが、このユーモア溢れる詠詩の背景には、「売レ色丹州容忘レ醜。得レ名赤坂口多レ髭」（中原広俊「傀儡子」『本朝無題詩』[11]巻一）と詠まれ、それに「参河国赤坂傀儡女中、有下多二口髭一之者上。号二口髭君一。故云」と自注される一片の逸事があるに過ぎない。内容が内容だけに、餘程強烈なイメージとして、たまたま読耕の記憶に残ったと言うに過ぎないことなのだろうか。

また、次のような作も似たような意味で興味深いものがある。

漫和二壁陰軒主一二月九日雪詩韻一

六出過レ時相見稀。粉塵鋸屑更軽霏。莫レ教三在列認二梅色一。

二月真成雪満衣。

（『読耕林先生詩集』巻十六。承応四年作）

時じくの雪とはさても稀なこと。粉塵かおがくずかと譬えもするが、それよりも軽いひらめき。かの在列をして梅花の色と認めさせませぬように。二月にいやはや雪だらけの衣になりました。そんな一詩の末尾には「橘在列者、本朝中古之詩人也」と第三句を意識した自注が見えているのだが、さりとてそのままでは何のことか埒があかない。実はこの一句、橘在列（尊敬上人）の「折二梅花一挿レ頭。二月之雪落レ衣」（『朗詠』巻上・子日30『文粋』巻十一・350「春日野遊和歌序」）を想起できて初めて読耕の心意を理解したことになる。確かに中古・中世を通じて『和漢朗詠集』は広く親しまれ、前掲句をふまえた表現も『平治物語』（巻下「常盤落ちらるる事」）や、『千載集』（21）『新古今集』（50）、更に謡曲「高砂」「弱法師」等に取込まれるが、[12]「橘在列」の名から直ちに前掲句に至るにはやや距離が必要ではなかろうか。[13]そもそも、在列について「本朝中古之詩人也」などと解説せねばならないこと自体に、相手の十分な理解を期待していない気配さえ感じてしまうのは稿者の思い過ごしだろうか。それにしても、読耕の本朝詩の享受は、どこか皮相的享受と言ってしまうには惜しい一面を持っているように思われてならない。[14]

## 四

ところで、読耕は当初どのような詩文に親しんでいたのだろうか。[15]「靖四歳不レ能レ立、及二十餘歳一、無レ異二於常人一。超二成童一一両年之間、学術大著。皆謂二大器晩成一也」（「西風涙露上」『鵞峰先生林学士文集』巻七十七）などとあるのに依ると、兄の眼には十五歳を過ぎてから読耕の学問は著しい進捗をみたことになる。この頃の読耕作「聴二黄詩一講レ文」（『読耕林先生文集』巻十八、寛永十七年十二月）は、兄より黄山谷詩集の講説を受けたことを記す。『三体詩』や『錦繡段』と同一に論じてはいけない詩家の『正法眼蔵』にも相当する必読書というわけで、兄が発憤奮然として講じたのだと言う。もともと五山禅林では、蘇黄詩と『古文真宝』『三体詩』『錦繡段』がよく講じられたものだったが、近年では下の三書を講ずるに止まり、蘇黄詩が講ぜられること稀と歎じ、詩人の大家冠冕たる李杜を載せぬ『三体詩』や、李杜韓柳欧蘇の詩無く、黄山谷も僅々一首しか収載せぬ『錦繡段』を強く批判し、李杜韓柳蘇黄の詩文を推奨しているところに彼らの志向を明確に見出しうるが、さりとて、読耕自身特定の詩家に執していたわけではない。

寛文元年五月二十五日、読耕没後七旬餘日を経て、読耕在りせばの強い哀悼の下に綴られた「感懐記事」（『鵞峰先生林学士文集』巻七十六。殊に其四参照）に依ると、読耕の書架には、総集としては『万首唐人絶句』（宋・洪邁）『全唐詩話』（宋・尤袤）『唐詩紀事』（宋・計有功）『唐詩品彙』（明・高棅）『唐詩正声』（同）『唐詩解』（明・唐汝詢）『唐詩選』（明・李攀龍）『唐詩類苑』（明・張之象）『唐百家詩』（明・朱警）などが並んでおり、別集としては、世上に流布していた李白・杜甫・韓愈・柳宋元の集や『白氏文集』はじめ、初盛唐の十二家集、及び張九齢・韋応物・陸贄・元稹・孟郊・杜牧等の集を求め、崔顥・盧綸・李元賓・李翺・李紳・李賀・盧仝・許渾・温庭筠・李商隠・韓偓・劉禹錫・李徳裕・欧陽詹・黄滔ら及び唐六家集等の書写にも餘念なかったようである。こうした詩文集への該通が詩文の才に愈発揮されたようで（集句詩愛好もその一端）、

汝博聞強記、一過成レ誦。詩賦文章、下レ筆不レ休。一時之奇才、千里之駿足也。

（『鵞峰先生林学士文集』巻七十五「顕考貞毅先生読耕斎林君神主」）

博二覧群書一、比レ及二弱冠一、経子史集百家小説及本朝国

史雑記、無レ不レ触レ目。作レ詩作レ文、長短雑体、出二於腹藁一、下レ筆如レ神。

（同巻七十五「貞毅先生読耕斎林君之墓」）

靖十七歳而先考家蔵数万巻、悉周覧之、臆記不レ忘。其作レ詩無二草案一、其作レ文、或千字、或数百字、筆不レ加レ点也。先考称曰、彼記憶過レ我也。水戸参議君、以為二文才絶倫一也。

（同巻七十七「西風涙露　上」）

などという称辞が見えている。読耕は唐詩を中心に飽くなき渉猟を続け、その業中途にして倒れた（兄に依れば披見叶わなかったものに例えば中唐十三家集などがあったという）感がある。

王朝詩人との関わりに興味を抱く稿者にとって今一つ気になることと言えば、読耕が元白圏の詩をどのように考えていたかということであろうか。父羅山は若年より白詩に親しみ、那波道円本に加点したりもしており、

楽天詩傷二於俗一、若用二楽天一則元稹亦難レ捨矣。不レ然、楽天固是浅俗也、使三老嫗解二其詩一、故如レ此。然其詩之灑落博達、固非三尋常韻士之所二髣髴一也。新旧史共称二其能一レ詩。且方今之詩話、莫レ不レ標二出香山一矣。元稹者不レ被レ標二題於詩話一。其為レ詩也、不レ可下与二楽天一一視上也。（中略）元稹其必除レ之而可也、楽天其可レ弃レ之乎。

（「示二石川丈山一〈寛永十九年作〉」『林羅山文集』巻七）

などに白詩傾頭を伺い知ることができようか。また、兄鵞峰は父業を継ぎ『白氏文集』に加点、更に嘗て紀斉名が一条帝の命に応えられなかったという『元氏長慶集』にも新点を付しているから、関心一通りならずその詩文集には多く白詩を引用して遑いが、これを父程に積極的に推奨する論陣を殊更に構えてはいない。それでは、読耕はどうかと言えば、次の言説を引くに如くはなかろう。

元軽白俗、是坡老之藻論也。夫香山之人品筆力、比二於微之一則大有二逕庭一。而微之之閑贍敷演、亦唐賢之一名家也。其楽府之舒暢、長韻之発揚、険韻之不レ渋、短律之稍穏、可二見而知一焉。

（「重復二静軒子一〈万治二年作〉」『読耕林先生文集』巻五）

父の軽んじた元稹詩をも積極的に認めようとする点に聊か新鮮さを覚えるが、彼の詩文を検して見る限り、やはり白詩により強く引かれていたことはまず間違いないようで、「白香山之過二襄陽一也、曰懐レ人到二其郷一、彼読二詩篇一而慕二浩然一、与観二山水一以挹二清芬一、其閑情之浅深可二以察一焉」（「游二室八

島」記」『読耕林先生外集』巻十四）には「遊二襄陽一懐二孟浩然一」（『白氏文集』巻九・430）詩を旅途ゆくりなく喚起した風情が伺えるし、「端午詩」（『読耕先生詩集』巻一）では「揚州百鍊銅」と詠まずにはおれず、劉白贈答の「秋雪」（「三十雪詩」同上）に言及したかと思えば、「藤花」（同巻十二）に慈恩寺三月の詠句を掛け、「薔薇」（同上）を詠んでは「楽天階底風」の句に「階底薔薇入レ夏開」の名句を仄す。読耕は兄の息梅洞の幼学の指導をしていたが、その新婚の席上「鳥雀群飛欲レ雪天」（白詩「歳晩旅望」詩の一句）の句題で七絶を賦し（同巻十六）痘後の保養につとめる梅洞に、

香山芳声満二九有一。他後到二兜率天一否。語雖レ近レ俗又名家。琅々長短三千首。

と白楽天を詠じた詩を贈っていることなども注意されるのではないかと思われてならないのである。

［注］

（1）『林羅山文集』『林羅山詩集』（京都史蹟会編）については平安考古学会版（大正九―一〇年）、弘文社版（昭和五年）があり、近年はぺりかん社から覆刊（全四冊。昭和五四年九月）されて読書に便がはかられた（但し誤植の多いのが難）。また『鵞峰林学士文集』についてもぺりかん社より、近世儒家文集集成第一二巻（編集・解説は日野龍夫氏。平成九年一〇月）として刊行されたのも最近の慶事である（詩集が入らなかったのは残念）。猶、両書とも返り点・送り仮名が付されており、小生の如き無学の徒には良き便りとなる。が、『読耕先生全集』（内閣文庫蔵本を披閲）は無点本である。猶、兄鵞峰による「読耕林子年譜」は『本朝通鑑』首巻（図書刊行会刊、大正九年）にも翻刻所収されている。読耕斎に関する専論には、安川実「林読耕斎の学問及び思想――義公史学との関聯において――」（『神道学』三六号、昭和三八年二月）があるくらいであろうか。この論は読耕斎の為人・鵞峰との思想的対立・学問態度・史学思想などを的確に纏めた卓論である。猶、其他についても安川『本朝通鑑の研究――林家史学の展開とその影響――』（言叢社、昭和五五年八月）に多大な学恩を蒙った。

（2）この頃の勉学ぶりは「除夜感懐文」（『読耕林先生文集』巻十八・雑著上）で己の一年間の学問を省みているのが参考になろう。それに依れば、四庫の書三百三十二本を読破するも甚だ少ないものだとし、後漢の辺韶が自分の腹は五経を納れる笥だと言った故事や蘇東坡が万巻を胸中に置いていたという美談に及ぶべくもないのが愧ずかしいと記し、更に著述せる文十六篇・詩九十七篇・問答文六十六篇・啓札一篇・柏梁詩一通・短文四十

三・聯句八を成したと数え挙げている。そして、文の合計八十二篇、詩九十七篇とは実に少ないもので、梅尭臣が自分に毎日作詩を課したことや、陸游が三日も詩を作らないと「貌の衰ふるを覚ゆ」と言った故事を引きつつ、実践すれば六十の生涯で万首を越えるはずとも記す。読耕は実は漢籍のみを読書の対象にしていたのではない。『日本書紀』『職原抄』といった国書の筵下にもあったが、まだ聴講に預るばかりで、司馬光が七歳で『左氏伝』を講じたのには比ぶべくもないと、これまた故事を用いて、光陰過ぎ易きうちにも学問につとめずんばあるべからざる、その気概を記している。

(3) 菅原道真の天神信仰に絡む、例えば「我菅丞相本儒家、詩比二楽天一無二等差一」（「北堂参二無準一図」『村庵藁』巻上）のような作や賛の類は一応例外として除き、稿者の倉卒の間の一瞥に触れたものを示せば、「昔者延喜聖朝而有二名臣一、曰、紀納言長谷雄卿也、其文章之麗、而望重二一時一也、亦無下出二其右一者上矣。其苗裔之相承而不レ墜二文誉于今一者、但有二紀府君（俊長）之一家一矣」（『雪巣集』）「応製、賛二具平親王一〈延喜之孫、源家之祖、赤松之先祖也〉」（『黙雲藁』）等の若干に限られるようで、その長谷雄や具平親王にしてもその末裔の述作要請に答えたというだけのことで、主体的なものではないことは明白である。

(4) 寥々たる中の一端を詩文集中より任意に摘録すれば、「題二後鳥羽帝祠二二首」（『空華集』巻七）「鎮西八郎為朝箭図」（『村庵藁』巻上）「応制賛二淡海公一」「応制賛二博雅卿一」（『黙雲藁』）「伏見翁」（『翰林葫蘆集』）等があり、横川景三（『補庵京華続集』）あたりに依ると、天皇が「本朝故事三十題」を選して漢詩を作らせたこともあったので、禅林も時代を下ると本朝故事詠が稀に見えるようになる。『文明年中応制詩歌』はそうした文明年間の作をまとめた代表的なものということになろう。ところで、「扇面〈薩摩守問二俊成卿一図〉」（『翰林葫蘆集』巻三）の一篇は、平忠度が都落ちの折、歌の師藤原俊成に己の歌が勅撰集に入集するよう期待し歌巻を届けた故事（『平家物語』巻七〈薩摩守・俊成卿対面の事〉や謡曲「忠度」など）を描いた扇面絵に付した七絶だが、本朝の故事絵と漢詩との取合せも、存外五山の詩文集には少ないように思う。

(5) 例えば父羅山の現存の詩文から挙げるだけでも実はかなりの量になると思うのだが、とりあえず代表的なものを挙げるとすれば、「倭賦」（慶長十七年、『林羅山文集』巻一）「長楽寺別業記」（寛永元年、同上巻十七）などに先ずは指を屈すべきか。

(6) 因みに、大江匡衡のことは『江吏部集』（巻中「述懐古調詩一百韻」）、藤原常嗣は『続日本後紀』（承和七年四月二十三日条）又は『公卿補任』（天長八年）、藤原諸成は『文徳実録』（斉衡三年四月十八日条）、惟宗隆頼は『古今著聞集』（巻四・文学第五「勧学院の学生集まりて酒宴の時惟宗隆頼自ら首座に着く事」）というように本来は諸書に散在する記事を援用している

のである（恐らくこうしたことを分類しまとめた控書などがあった可能性が高い）。猶、南渕弘貞については典拠未詳。

（7）「倭漢十題雑詠」を中心とする故事詠の史的意義の詳細については、宮崎修多「国風・詠物・狂詩――古文辞以前における遊戯的漢詩文の側面――」（『語文研究』56号、一九八三年十二月）「古文辞流行前における林家の故事題詠について」（『近世文芸』61、一九九五年一月）の瞠目すべき卓論がある。また、堀川貴司「近世における『本朝無題詩』の研究と享受」（『和漢比較文学』13号、平成六年七月）でも『無題詩』所収詩を中心に論及され、王朝詩の享受を鮮やかに説いている。

（8）鵞峰「倭漢十題雑詠序」（『鵞峰先生林学士文集』巻八十一）もあり参看した。猶、その題の多くは読耕の草創したものだと鵞峰が記していることに稿者は頗る興味を覚える。

（9）読耕の王朝文人逸事を詠む詩を少し補足的に挙げると、「源順」「清原頼業」（十博識）「藤原春海立神祠策」（十対策。『文粋』巻三・74）「藤原佐理」（十書）「道風朗詠」（十謬伝。『徒然草』88段）「大友皇子」（十皇親）が『読耕林先生詩集』（巻十二）に、同巻十三には「大江音人読二史記一」（十侍読。『三代実録』貞観十七年四月二十八日）「菅野佐世読二群書治要一」（同上、貞観十七年四月二十五日）「藤原道長好二白犬一」（十好。『宇治拾遺物語』巻十四―10、『古事談』第六―62、『十訓抄』第七―21）「有智子内親王」（十斎王）「大江維時読二洛中宅主名一」（十敏才。『続古事談』第二―25）、同巻十四には「橘広相犬」（十変形。『十訓抄』第四―16）「清原頼業講二周礼一」（十講）などがある。

（10）後述するように三河国赤坂の傀儡子の呼名。ところが、『続本朝通鑑』（巻五十・崇徳天皇四、保延三年末尾）では「先レ是、江口神崎多二遊女一。洛人無二貴賤一、往二来于此一、以為二好色之戯一。其後有二遊女孫君髭君之徒一、為二傀儡之戯一、衒レ色惑レ人（下略）」などと江口・神崎の遊女名とされている。

（11）『本朝無題詩』の林家を中心とする享受については注（7）所引堀川論文に詳しく（前掲対応例示中の「藤敦光遊二青龍寺一」についても既に指摘されている）、本詩についてはたまたま漏れたに過ぎないだろう。また、「九月十三夜会集二于文殊院一、探下藤原知房所レ賦、沙庭一夜踏二寒影一、銀漢三更望二冷光一、十四字上而余得二三字一」詩（『読耕林先生詩集』巻十七、万治元年作）は知房「翫月詩」（『無題詩』巻三・162）の第五・六句になる。

（12）柿村重松『和漢朗詠集考證』（昭和四十八年、芸林舎）、大曽根章介・堀内秀晃『和漢朗詠集』（新潮日本古典集成、昭和五十八年、新潮社）などの影響文献一覧など参照。猶、読耕の詩に『朗詠』所収句に関わる表現を若干拾ってみると、「五月蝉声送二麦秋一」（巻上・蝉193）が「夏日雑興七首以三五月蝉声送二麦秋一為レ韻」（『読耕林先生詩集』巻十二、慶安四年）に、「鶯声誘引来二花下一」（巻上・鶯67）が「暮春雑吟〈集句〉」（同巻十

五、承応三年）に、「遊糸撩乱碧羅天」（巻上・春興19）が「三月二十三日遊二上野別墅一（集句）」（同上）に用いられている。また、「三十雪詩」中の「楽天鵞雪」（同巻一、寛永十七年）が「雪似二鵞毛一飛散乱」（巻上・雪376）、「可レ憐嫩柳無二気力一」（同巻四、寛永二十年、「和二石川君歳旦倭歌一」）が「柳無二気力一条先動」（巻上・立春4）、「九月初三夜。求レ句弄二浮仮一。又憐露似レ珠、与レ月両無レ価」（同巻十、慶安二年、「十一月三夜対月雑吟」）が「可レ憐九月初三夜。露似二真珠一月似レ弓」（巻上・露338）を意識した表現であることも確かである。猶、『朗詠』古注の享受層の視点からも考えられるべきだろう。

(13) 例えば「橘在列春日野遊序曰、折二梅花一挿レ頭、二月之雪落レ衣」、或は「橘在列朗詠句曰、折二梅花一挿レ頭、二月之雪落レ衣」などと注記にあれば完結すると思うのだが。

(14) 「靖（読耕）雖レ不レ預二系図事一、然与レ余共助二先考一而修二通鑑前録一。且自二延暦十一年一至二天長十年一、則緒嗣公所レ紀久闕而不レ伝。靖採二摭諸録一補成矣。其間粗懐風藻凌雲集経国集文華秀麗所レ載、群作分二載各年一。而使三我国文章伝二於後世一、其功不レ為レ少矣」（「西風涙露　中」『鵞峰先生林学士文集』巻七十八）とある評価を強調してみたいのである。

(15) 林家の羅山・鵞峰・梅洞については松下忠『江戸時代の詩風詩論』（第一章第四節に羅山、第七節に鵞峰、第八節に梅洞。昭和四十四年、明治書院）に詳しく、読耕についても言及するところあり、学恩を被った。

（付記）本稿は二〇〇〇年度総合文化研究所研究助成「林読耕斎の漢詩文についての研究」による成果の一斑である。